田園回帰

勉強会・第 2 回報告書

～地域の内発的発展を、「地域」で考え、
建設コンサルタントの役割を見つめなおす～

2016 年 11 月 25 日（金）・26 日（土）

来ちみなぁハウス（豊後大野市犬飼町）

主催　（一社）建設コンサルタンツ協会　九州　郷づくり共助ネットワーク研究会

目 次

「田園回帰」勉強会報告書の作成にあたって …… 1

第１章 「田園回帰」勉強会第２回の概要 …… 2

（１） 「田園回帰」勉強会・第２回の趣旨 …… 2

（２） 「田園回帰」勉強会・第２回プログラム …… 3

（３） 「田園回帰」勉強会・第２回参加者 …… 3

第２章 現地報告等 …… 4

（１）現地報告～豊後大野市 エネルギー政策の考え方～ 要約 …… 4

（２）現地視察 …… 5

（３）田舎体験（田舎のおやつ作り） …… 6

第３章 アイデア提案 …… 7

（１）「ぶんごる食堂」（Ａチームからのアイデア） …… 7

（２）「川・里体験」（Ｂチームからのアイデア） …… 9

第４章 今後に向けて …… 11

「田園回帰」勉強会報告書の作成にあたって

平成 27 年度の市町村による「地方創生総合戦略」の策定を受けて、今年度は多くの地域で雇用創出や「田園回帰」などの人口回帰に向けた取り組みが進められています。

この全国的な「地方創生」の胎動に対して、我々建設コンサルタントはどう関わるのか？

長年、農山村部の地域支援活動を進めてきた「九州 郷づくり共助ネットワーク研究会（共助研）」は、昨年度、「田園回帰（地方創生）」に関する勉強会を開催し、「田園回帰」への建設コンサルタント技術者としての関わり方について検討しました。

ただし、「地方創生」施策が目標とする新たな地域社会形成には今後 5～10 年以上の時間を要すると考えられます。その展望のなかで、我々建設コンサルタントは「地方創生（田園回帰）」の動きを息長く支えていくことが必要となっており、このような認識や問いかけに対応すべく、「田園回帰」勉強会第２回を開催しました。

本報告書は、同勉強会の概要ならびにその活動を通して得られた知見・体験等について紹介するものです。この記録が、建設コンサルタントの新たなフィールド開拓や社会的役割のあり方について関心をお持ちの多くの技術者の方々にとって、その方向性確認の一助となりましたら幸いです。

平成 29 年３月

九州 郷づくり共助ネットワーク研究会
「田園回帰」勉強会事務局一同

地方創生（田園回帰）施策の現場を確認し、地域の人びと共に考えよう！

■ 地域の現場で地方創生（田園回帰）施策の現状を確認

・地方創生に向けて地域づくりに取り組む地域の現場に入り、その現状を確認します。
・具体的には、勉強会第１回で報告された大分県豊後大野市での取り組みを視察します。

■ 地域の人びと腹をわったつきあいで、地域づくりのきっかけや合意形成について検討

・「内発的発展」を展望している地域に入り、地域の人びとと共に「内発的発展」を検討します。
・具体的には、きっかけづくり（Ｂ）及び地域の合意形成（Ｃ）への取り組みを検討します。
・検討の会場は、地域の空き民家を活用した交流拠点「来ちみなぁハウス」です。

■ 「内発的発展」における建設コンサルタントの役割を検討

・「内発的発展」に向けた実行体制（Ｏ）を検討する中で、「よそ者」としての建設コンサルタントにできる関わり方を検討します。

第１章　田園回帰勉強会第２回の概要

（1）「田園回帰」勉強会・第２回の趣旨

■ 「田園回帰」勉強会第１回（2015 年７月開催）について

地方創生施策の柱の一つである「田園回帰」に対して、建設コンサルタント技術者が、どう向き合っていくのか。その問いかけに対して、農山村部の自治体関係者や地域づくりコンサルタント、さらに学識経験者からの情報提供・アドバイスを受けながら、コンサルタント技術者自身で検討する勉強会を昨年７月に開催しました。

検討成果として、“地域・行政と一体となって総合的なコーディネートを”、“地域の信頼を得ているコンサルタント技術者の存在が重要”、“必要な時にリタイア者や現役からの支援が得やすいネットワーク・仕組みが重要”、“建設コンサルタントの技術者にしかできない真摯な対応を”等の貴重な提案が出ましたが、時間の制約等から具体的な活動内容の検討には至りませんでした。

勉強会の全般的な反省として、時間不足であったことやテーマの深掘りが必要であること等が指摘され、引き続き勉強会に取り組む必要性が高いことが確認され、勉強会第２回の開催となりました。

■ 「田園回帰」先行地域における「内発的発展」の取組

昨年度の「地方創生」の動き以降、国や学識者等により「田園回帰」に関する多くの提言や情報提供（農文協発行のシリーズ田園回帰等）が行われていますが、その際に複数の識者から“「田園回帰」先行地域の多くで「内発的発展」が取り組まれている。”と指摘されています。

地域の「内発的発展」とは、地域に関わる人たちが主体となり、地域の資源を活用して産業を創出し、地域を発展（あるいは維持）させるものであり、従来のように短期間で効率性や生産性を重視し、利益志向で行われてきたビジネスとは一線を画すもの、と定義されています。

地域に対する愛情や熱意が優先されるこのような「内発的発展」の事業においては、お金よりも「地域のために、人のために」という熱意の源泉となるきっかけ（Ｂ：Background）や、その思いを共有する地域の人々がいて彼らを巻き込んでいく合意形成（Ｃ：Consensus）、そしてそれを実行可能にするための組織化（Ｏ：Organization）が動機づけとなり、その立ち上げ期（ＢＣＯ期）によそ者視点が入っての支援は極めて重要である、と言われています。

■ 地域の「内発的発展」に、建設コンサルタントはどう向き合うか

我々建設コンサルタント技術者が地域と関わりを持つのは、まさにこの立ち上げ期（ＢＣＯ期）です。しかしながら一方で、“ワークショップを用いて地域課題を抽出だけしてその後具体的なサポートをせずに地域を去る”、“地域資源を発掘だけしてその後に繋げない”など全体的なコーディネートをしない（できない）関わり方による「内発的発展」への阻害も指摘されています。

昨年度の勉強会では、これらの指摘に対する自省的な観点からの提言も行われており、地域の「内発的発展」に対して建設コンサルタント技術者はどう向き合い、いかに関わるべきかについての、さらに掘り下げた検討が必要となっています。

また、「田園回帰」の実態として、移住・定住だけでなく二地域居住や二地域就業等もその可能性が報告されており、勉強会第１回でのキーワードとなった「（個人タクシー的な）一人コンサルタント」などの建設コンサルタント技術者の「田園回帰」のありようも、その具体化に向けた取り組みの展開が強く支持されつつあります。

■ 勉強会第２回の検討テーマ

昨年度以降のこのような動向をふまえて勉強会第２回を開催することとし、勉強会における検討テーマを以下のように設定しました。

～地域の「内発的発展」を、地域で考え、建設コンサルタントの役割を見つめなおす～

（2）「田園回帰」勉強会・第 2 回プログラム

11/25 （金）	9:30	参加者集合・福岡出発
	12:30	参加者「来ちみなぁハウス」到着
	13:00	①　開会／オリエンテーション（プログラム・課題説明）
	13:30	②　現地報告～豊後大野市における地方創生の取組～ ●豊後大野市　地域創生課課長　新宮幸治氏
	14:00	③　現地視察・田舎体験（2.5 時間） ●現地視察コース（豊後大野市内） ●田舎体験コース（田舎のおやつ作り）
	16:30	④　グループワーク（1 時間／地元関係者と意見交換）
	17:30	⑤　参加者入浴（臼杵湯の里）
	19:00	⑥　交流会（食事・地元関係者との交流）
		片付け・就寝
11/26 （土）	7:00	起床・朝食・現地散策
	9:00	⑦　グループワーク（3 時間／事業計画作成・地元関係者と意見交換・コンサルタントの関わり方検討）
	12:00	昼食
	13:00	⑧　全体ワーク（1.5 時間／発表・全体総括）
	14:30	⑨　閉会／片付け
	15:00	参加者「来ちみなぁハウス」出発
	18:00	福岡帰着・解散

（3）「田園回帰」勉強会・第 2 回参加者

区分	所属	氏名
一般参加者 （1 名）	建コン協会会員	冨士　祥輝（福山コンサルタント）
豊後大野市 （3 名）	地域創生課	新宮　幸治（課長） 森本　伸治 後藤　祥
長谷地区 （14 名）	柴北川を愛する会 （11 名）	赤峰　映洋 甲斐　能美　＋　レディース 6 名 渡邊　雪法 高野　和幸 三浦　君重
	住民 （3 名）	渡邉　剛　　（ながたに振興協議会） 平石　由美子（ながたに振興協議会） 大塚　智代　（郵便局）
共助研 ＯＧメンバー （7 名）	全体運営・広報・会計	波木　健一 前田　武
	チーム運営（2 ﾁｰﾑ）	木寺　佐和記 波多野　健志 森脇　亨
	記録（ｶﾒﾗ・録音）他	矢ヶ部　輝明
	交流会運営	松尾　敏彦

第２章　現地報告等

（1）現地報告～豊後大野市 エネルギー政策の考え方～　要約

昨年度の勉強会第１回では、豊後大野市の橋本市長より、「地方創生と田園回帰への取り組み」と題した基調報告をしていただきました。勉強会第２回では、その後約１年を経ての同市における地方創生施策の実情を確認すべく、会場を豊後大野市犬飼町長谷地区に移すとともに、現地での取り組みに関する視察を行いました。

この視察に先立って、豊後大野市地域創生課の新宮課長から、国の地方創生関連交付金を活用した同市での多彩な事業展開の中で、特に重点的に取り組まれている「豊後大野市のエネルギー政策」について報告していただきました。以下に、その要約を紹介します。

報告　：　豊後大野市　エネルギー政策の考え方

報告者：豊後大野市地域創生課　新宮幸治氏

■　エネルギー政策の変化により、分散型再生エネルギーシステムへ

環境省の試算によると、全国の自治体の約９割でエネルギー関連の支払いが地域外に資産流出しているそうです。国は、エネルギーの地産地消でこの資産流出を改善できると考えて、第４次エネルギー基本計画で、分散型再生エネルギーシステムの導入を支援する方針を固めました。

豊後大野市においても、地方創生施策の重要な柱として、本市の特徴を生かした自立的・持続的なエネルギー社会のかたちづくりを目指すこととしました。

■　豊後大野市内で発電した電力が、現在は金銭と共に都市部へ流れている

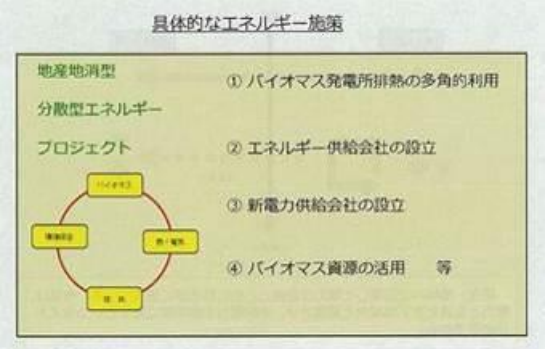
2012 年から固定価格買い取り制度（FIT）がスタートし、2016 年４月からは電力小売全面自由化もスタートしました。市内には、市営の太陽光発電所、土地改良区の小水力発電所、誘致企業の木質バイオマス発電所があり、これらの再生可能エネルギーで一般家庭約４万戸分の発電量が供給されています。ちなみに、市内の世帯数は 1.65 万戸です。しかしながら、今は、この電力料金すべてが豊後大野市から都市へ流れています。

■　豊後大野市でも、地産地消型・分散型エネルギープロジェクトの取り組みを

これらの地元で賄えるエネルギーについては地元に供給することで電力と金銭を循環させ、さらにその余剰電力を都市に流すという考え方への転換が必要です。

また、電気だけでなく熱の利用も推進するため、総務省の地産地消型・分散型エネルギープロジェクト事業において、木質バイオマス発電所の発電過程で出る排熱利用を提案し、総務省からの認定を受けました。この事業による具体的な施策としては、先ずバイオマス発電所の排熱の多角的利用です。空調、乾燥、温水利用等を検討しています。

電気と熱の利用の具体的な取組みとしては、市外に出ている電力料金を市内に留めて循環させるための新電力会社の設立です。これについては、既に新電力会社を設立して電力の地産地消に取り組んでいる福岡県みやま市と連携協定を行いました。



さらに、バイオマス資源として、森林から出る未利用材の活用を検討しています。特に、竹をチップ化してエネルギー資源として活用します。その他にも、休耕農地を使った植物性のバイオマスや汚泥を使ったバイオマス等を、資源として計画に取り込む予定です。

バイオマスをチップ化し小型のボイラーを各公共施設に設置してエネルギー供給する事業を、来年から展開する予定で、分散型プロジェクトはこれがベースとなります。公共施設ひとつひとつに熱源をもったボイラーを設置することで、災害発生時のリスク分散ともなります。後ほどの現地視察では、このプロジェクトの一環としてのバイオマス発電施設についても見ていただければと思います。

（2）現地視察

田園回帰勉強会を始めるにあたり、参加者が「現地視察班」と「田舎体験班（田舎のおやつ作り）」に分かれて地域の現状を改めて認識しました。現地視察班は①大野町：インキュベーションファーム、②清川町：里の旅公社、③三重町：バイオマス発電所の３か所を訪問視察して、意見交換などを行いました。

■ 大野町：インキュベーションファーム

インキュベーションファームでの集合写真

平成 22 年度に豊後大野市は「夏秋ピーマン」を新規就農者の中心品目に定めました。平成 24 年 1 月から JA のピーマン部会やファームに配置した営農指導員等によりインキュベーションファームを開講し、農業の担い手の確保と併せてピーマンの生産拡大を図っています。

研修は２年間で、１年目は運営方法など、２年目は 15ha の農地を模擬経営、３年目はそれぞれの農地を探して就農というスケジュールです。研修生へは〇宿泊施設、〇研修費用の融資（月額 15 万円）〇研修後の農地斡旋などの支援が受けられます。現在は５期生の塚越夫妻、岡崎夫妻が２年目を迎えられています。仕事は大変ですが、来てよかったとのコメントをいただきました。

■ 清川町：里の旅公社

里の旅リゾート ロッジきよかわでの集合写真

「人と伝統といま」が結びついた「ここにしかない」場所、「ここでしかできない」旅。それをわたしたちは「里の旅」と名づけました。（HP より）

平成 28 年 7 月よりオープン。場所は清川町の日本百名山・祖母山を水源とした奥岳川のほとりにツリー型ハウス、ログハウス、ドミトリー、キャビンハウスなどの宿泊施設です。目の前の「清流プール」が自慢とのことです。7～9 月までは大変は賑わいで福岡を中心として広島、京都などからの利用客があるそうです。冬の時期をどうするかという課題はあるものの今後は、米炊き体験、ピザ焼き体験、農業体験、文理大との体験学習の開催など「ソフト面の充実を図りたい」とのコメントいただきました。

■ 三重町：バイオマス発電所

（バイオマス発電所内部は時間の関係で視察はできず、大分合同新聞 H28.9.30 のＨＰを引用しました。）

豊後大野市三重町のエフオン豊後大野発電所

左奥のボイラーで木質チップを燃やし、発生した蒸気を左手前・中央のタービン・発電機建屋に送って発電。右の復水器で蒸気を冷やして水に戻す。

バイオマス発電事業を展開するファーストエスコ（東京都）グループが、豊後大野市三重町菅生に建設していた木質バイオマス発電所「エフオン豊後大野発電所」の竣工（しゅんこう）式が平成 28 年 9 月 29 日、現地であった。（14 年９月に着工）

年約２１万トンを扱う木質チップサイロや、チップを燃やして蒸気を発生させるボイラー、タービン・発電機建屋、蒸気を空冷して水に戻す復水器、貯木場などを整備した。

総工費は約８０億円。定格出力は１万８千キロワットで、国内材チップを燃料とする同種の発電所では国内トップクラス。

（3）田舎体験（田舎のおやつ作り）

■ はじめに

今回の勉強会では、『長谷地区に伝わる身近な地域文化を継承するリスト（おかし編）』として整理が進められているおやつについて、作成途中のレシピや柴北川レディースのアドバイスにより、普段ほとんど料理をしないオジサンが、新たにリストへ追加する「石垣もち」と完璧なレシピの完成を目指す「じり焼き」に挑戦し、誰でもが作れるレシピの完成と手作りおやつの価値の再確認を行いました。

■ 石垣もちレシピ

材料（小皿 21 個分）	作り方
・小麦粉　：300g ・砂糖　　：60g ・ﾍﾞｰｷﾝｸﾞﾊﾟｳﾀﾞｰ：小さじ 3 杯 ・さつま芋：900g ・塩　　：少々 ・水　　：約 200cc	①さつま芋の皮をむき、むいたさつま芋は水を入れたボウルにつける。 ②むいたさつま芋をさいの目にカットし、水を入れたボウルにつける。 ③さいの目にカットしたさつま芋はザルに移し、洗う。洗った後は水を切る。 ④小麦粉をふるいにかけボウルに入れ、砂糖も同じようにふるいにかけボウルに入れた後、塩、ベーキングパウダーを加えて、ボウル内の材料をヘラでよくかき混ぜる。 ⑤水を切ったさつま芋を粉が入っているボウルの中に入れ、均等に粉が付くようにかき混ぜる。 ⑥ボウル内の材料に水を少しずつ加えながら、少しねばりが出るまでよくかき混ぜる（参考：水 200cc）。 ⑦かき混ぜた材料は、スプーンを使って小皿に移し、形を整える。 ⑧小皿を蒸し器に入れ、15～20 分程蒸し、蒸しあがったら完成です。
出来あがり	

■ じり焼きレシピ

材料（24cm×6 枚分）	作り方
・小麦粉　：200g ・塩　　：小さじ 1/2 杯 ・卵　　：2 個 ・水　　：250cc ・黒砂糖　：70g ・サラダ油：適宜	①小麦粉をふるいにかけボウルに入れ、塩も同様にふるいにかけ加える。 ②水を徐々に加えて、だまが出来ないようにヘラでゆるく溶き、卵を割り全卵を加えて、泡だて器でよくかき混ぜる。 ③火力は中弱火とし、フライパンを熱して薄く油を敷き、オタマ 1 杯分の生地を入れ、フライパンを回し傾けて、生地を円形に均等に広げる。 ④表面に軽く焼き目が付く程度に焼き、片面が焼けたら、ひっくり返して両面を焼く。 ⑤焼きあがったら、皿に広げて粗熱をとる。 ⑥黒砂糖を荒く刻み、ほどよく冷めた生地の手前 1/3 位の所に、一直線に並べる。 ⑦並べた黒砂糖を中心に生地を巻き、巻き終りを下にして成形する。 ⑧形が整った後、食べやすい大きさにカットしたら完成です。
出来あがり	

■ 今後の地域づくりへの展開（おわりに）

クレープはフランスが発祥で、日本独自のクレープは 1977 年に生まれていますが、それ以前から「じり焼き」は存在していました。大分に古くから伝わっている「ほんもの」、日本のクレープの原形が「じり焼き」と言えます。

おやつ＝コンビニ・スーパーでのお菓子と違う、小麦粉を含め地域で収穫できる材料を使ったおやつは、長谷地区が目指している「ほんもの」の象徴の一つです。

少子高齢化や地方創生という時代の流れの中で、「ほんもの」にこだわる人間の意識も変化しています。安全安心な材料を使った地域ならではのおかしは、ネーミングや少しの工夫で大きく化ける可能性を秘めています。伝えることに加えて、そのきっかけを発見できればと思います。

第３章　アイデア提案

現地報告及び視察・体験等を行った後、参加者は、勉強会開催の舞台となった豊後大野市犬飼町長谷地区を対象として、地域の内発的発展に向けた地域づくりのアイデアを検討する、グループワーク（2 チーム）を行いました。

グループワークの検討テーマについては、事前に行った住民座談会において関心の高かった地域課題から、次の 2 テーマとしました。

Ａチームのテーマ：長谷に伝わるモノ・コトによるブランドづくり
Ｂチームのテーマ：柴北川を軸としたシンボルづくり

（1）「ぶんごる食堂」（Ａチームからのアイデア）

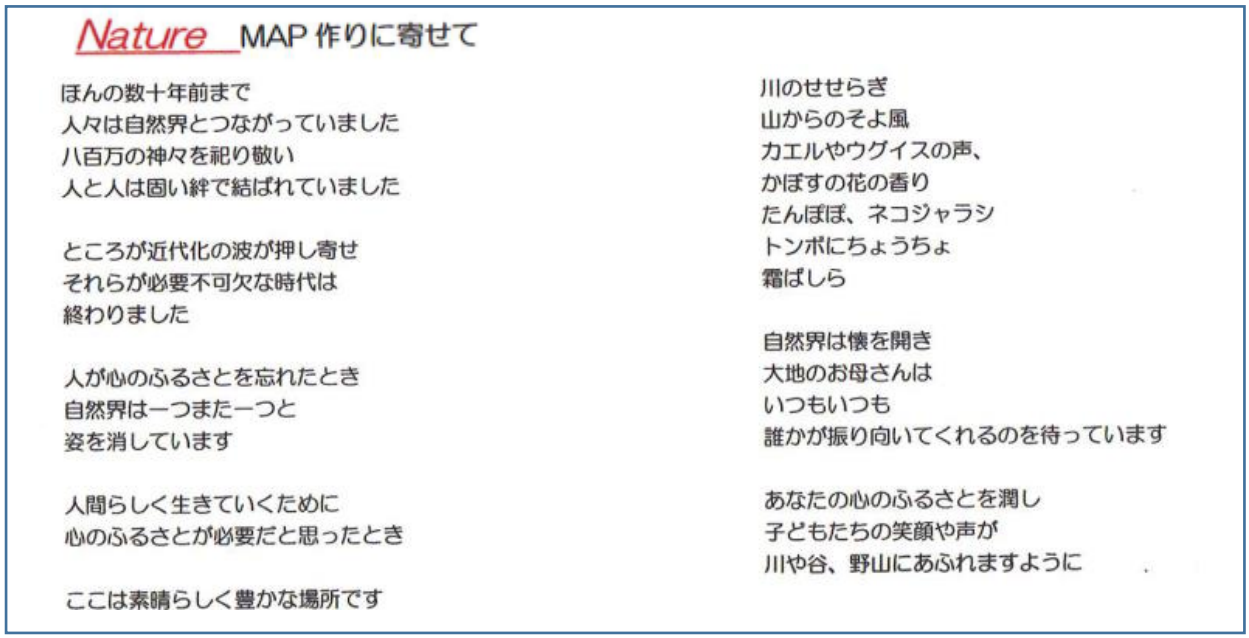
Ａチームに与えられたテーマは、「長谷に伝わるモノ・コトによるブランドづくり」です。

長谷地区には、古くから伝承されている食文化、手仕事、暮らしの知恵などが豊富にあります。しかしながら、これらの長谷ならではの文化要素を、若い世代に継承していく仕組みが十分ではなく、今後徐々に消滅していくことが懸念されています。

これらの文化要素について確認を行う中で特定の要素を取り上げ、それを資源・材料としながら新たに「長谷ブランド」 のモノ・コトとして売り出していくための起業に向けた事業計画及び事業体制を検討し、そこでの建設コンサルタントの関わり方について提案することを目標に討論を行いました。

■　話題提供

長谷地区の住民として参加いただいた平石氏より、昨年設置された長谷地区の「Nature　Map　作り」の際のコンセプト等に関する資料の提示とこれにまつわる話がありました。「Nature　Map　作り」のコンセプト資料は、長谷地区の貴重な資源を、「教育・経済・環境・農・食・健康・コミュニティ・精神」の８つのキーワードから、人間が生きていくことと取り巻く自然環境や生活環境への思いを綴ったものです。特に、平石氏が、諸事情で都会から、この長谷地区に移ってこられて体感したかけがえのない環境への思いが、熱く語られました。（下図）



Nature　MAP 作りに寄せて

ほんの数十年前まで
人々は自然界とつながっていました
八百万の神々を祀り敬い
人と人は固い絆で結ばれていました

ところが近代化の波が押し寄せ
それらが必要不可欠な時代は
終わりました

人が心のふるさとを忘れたとき
自然界は一つまた一つと
姿を消しています

人間らしく生きていくために
心のふるさとが必要だと思ったとき

ここは素晴らしく豊かな場所です

川のせせらぎ
山からのそよ風
カエルやウグイスの声、
かぼすの花の香り
たんぽぽ、ネコジャラシ
トンボにちょうちょ
霜ばしら

自然界は懐を開き
大地のお母さんは
いつもいつも
誰かが振り向いてくれるのを待っています

あなたの心のふるさとを潤し
子どもたちの笑顔や声が
川や谷、野山にあふれますように

図　長谷地区の「Nature Map 作り」のコンセプト（平石氏作成）

■ **ディスカッション**

話題提供での平石氏の話を受け、まず、便利さ優先である都会では体験できないこの長谷地区で味わえる**「長谷ぜいたく品リスト or 長谷プレミアムリスト」**を考えてみようということとなりました。これには、地元の方々から次々と、採れたてのキュウリ・トマト・さつまいも等の生野菜のおいしさ、体の芯から温まる薪ストーブや薪で沸かした風呂、夜を彩る満天の星やホタルの乱舞、朝の清々しさと鳥の声、騒音のない静寂の世界、柴北川の自然豊かな流れ等が紹介されました。

話し合いの中で一致した意見が、**「長谷地区の人は、いわゆる本物に囲まれた生活をしている」**ということで、これは、都会の人間から見ると、ある意味贅沢な生活であろうということです。

さらに、これらの贅沢は、便利さから遠ざかっていることで得られるものであり、人が便利さを優先して求める限り、味わえない贅沢です。もし、この便利さ優先の価値観が続くのであれば、失われてしまう贅沢でもあります。さらに、もし失われてしまえば、これらの価値・大切さに気付いたとしても、生物の絶滅と同じように、再び、取り戻すことはできないでしょう。

そのような後悔に陥ってしまわないために、まずは、長谷地区の住民自らが、この「贅沢な環境」を認識し、これまでの何もない地域・魅力のない地域との間違った考えに対して、**「魅力あふれる長谷地区」であると気付いてもらうための場所（拠点）**を提供する必要があるとしました。長谷地区の魅力は、長谷地区の人自らが理解しようということです。

■ **提案**

２日間の情報提供やディスカッションを踏まえ、「ぶんごる食堂の開設（長谷地区の将来像：本物に気付いた世界）」を提案します。

「ぶんごる食堂」の開設（長谷地区の将来像：本物に気付いた世界）

「ぶんごる食堂」のメニュー

- 地元の食材、それも採れたての野菜等を使った料理を提供するもので、メニューは、その日の食材の状況で決められるため、定まったメニューは設けない。
- また、提供者と客という区分を柔軟にし、来店者が自ら食材を畑で収穫することなどで、より多様な体験を提供できる食堂とする。また、野菜等の直販所としても位置付ける。

開設場所と対応

- 昨年オープンした「来ちみなぁハウス」を利用することでスタートさせる。そのため、まずは、「来ちみなぁハウス」に、だるまストーブを設置し、庭の一部を野菜の畑とする等の環境づくりを行う。
- 将来は、口コミにより長谷地区以外の来訪者も受け入れることとし、長谷地区の数か所に「ぶんごる食堂」の２号店、３号店等が開設されるという可能性をもつ。
- 運営に当たっては、無理をせず、やる気のある人、興味を持っている人を中心に実行委員会を結成するが、リーダー等を固定化せず、かつ、継続性のある地域のプロジェクトとして進めていく
- 原則、行政の力には頼らない。

広報・宣伝および情報管理

- 原則、口コミで伝わっていくものとし、ネットやマスコミ等を活用した PR を行わない。
- 仲間内による BLOG を開設し、「ぶんごる食堂」の営業日情報や食材情報を利用者に提供する。
- 建設コンサルタント技術者は、このプロジェクトに対して、「情報管理」と「情報提供」の支援を行う。

※「ぶんごる」とは、平成 28 年 3 月に策定された豊後大野市の第 2 次総合計画（市政の基本行動となる大綱）にて新たに創り出された言葉です。豊後大野市の豊後を動詞にしたような…

（意味） 1「豊かさを後に引き継ぐこと」、2「大地を守ること」、3「生き物を守ること」、4「伝統を守ること」、5「地域に参画すること」、6「チャレンジすること」、7「豊かさとは何かを考えること」

（例文）「ジオパークの自然をぶんごる」、「田んぼの生き物をぶんごる」、「地域の行事にぶんごる」など

（２）「川・里体験」（Ｂチームからのアイデア）

■　ワークショップ結果の概要

Ｂチームの成果は、別紙の成果取りまとめ結果に示すとおりであり、概要を再掲すれば以下のとおりです。

・プラン名：「長谷　川・里体験ビジネス」
・プラン実施の効果による長谷地区の１０年後のビジョン：「小学校の復活」
・事業の内容：長谷の川・里等を活かした春夏秋冬の体験ビジネスの実施
・事業体制：柴北川を愛する会を担い手として、行政や共助研の支援も得る
・スケジュール：まずはプラン詳細づくりと春夏秋冬一つずつの実施から順次拡大
・地区での合意形成方法：柴北川を愛する会がリードし、ながたに振興協議会に繋げる
・建設コンサルタント技術者の関わり方：プラン作成支援、ＰＲ支援、拠点作り支援

■　実現へ向けての課題

Ｂチームの検討結果は、柴北川を愛する会及び共助研のこれまでの活動がベースとなっているため、実現へのハードルの高さは、一見高くないように思えます。しかし、今回の目標の実現に当たっては、

・「ビジネスとして成立させること」を主眼においている
・さらに、「発展の姿として、交流→移住→定住→小学校の復活」を目指している
・柴北川を愛する会も共助研とも、会員も高齢化というそれぞれ組織内の課題もある

という視点からは、

・これまで以上に共通の目標に関して強い価値観の共有と実現へ向けての意志の再確認
・ビジネスとして成り立たせるための仕掛け作りやこれまでにないネットワークの構築
・会員能力のさらなる発揮や新しい力の獲得

が必要になると思われます。

■　課題解決へ向けての方策

以下に、主に共助研メンバーの立場から見た課題解決の方策について記します。

１）内発的発展の視座の力を借りて

今回の勉強会のキーワードは「内発的発展」でした。この概念は、新しいものではありませんが、課題解決策を考えて行く上で有用な視座を提供していると思われます。そこで、少々回り道となりますが、内発的発展について、簡単な振り返りをしたいと思います。

内発的発展に関しては、様々な学識者の考察がありますが、その一人の鶴見和子[1)]は、まず以下のような定義をしています。

２）鶴見和子による「内発的発展」の内容

① 単位は、近代化論の単位としての国民国家ではなく、「地域」であること。
② 発展の目標は、基本的要求の充足という人類共通のものであること。
③ 目標達成への経路と、社会変革の過程は、多様なものであること。
④ 地域住民の自己変革と主体性を重んじるものであること。
⑤ 以上、４点の他に、南北問題への視座、生態学的条件への配慮、社会運動としての性格、すぐれた伝統の革新的再創造など。

上記の定義からは、特に「地域住民の自己変革と主体性を重んじるものであること」の重要性を再認識する必要があると思われます。

３）発展の方法論について

また、鶴見は、地域の定義に関して以下のようなことも言及しています。

「地域とは、定住者と漂泊者と一時漂泊者とが、相互作用することのよって、新しい共通の紐帯を作り出す可能性を持った場所」、「紐帯」とは、共通の価値、目標、思想等、「漂泊者や一時漂泊者」とは、一時的に地域に入ってくる専門家やＵ、Ｉターン者で一定の影響を与える力を持った人材です。「新しい共通の紐帯」とは何を言っているのでしょうか？鶴見は、「内発的発展には、文化遺産、またはもっと広く言えば伝統のつくりかえの過程が重要である。」とも言っています。

■　具体策

上記記載事項を参考にして、考えられる具体的課題解決策を記せば以下のようになると考えられます。

１）共通の目標に関する価値観の共有

「交流→移住→定住→小学校の復活」という目標について、柴北川を愛する会で再認識する必要があると思います。日本全体で人口が減少し、各地域が必死でそれぞれの地域の衰退を防ごうと凌ぎあっている現在、これまでの活動内容や成果を振り返って、さらに一段上を目指すことを再確認すべきと思われます。内発的発展の基本原則を参考にすれば、国や行政の施策はあくまで手段であり、地域の内部の声に引き続き耳を傾け、主体性を保つためにも活動の原点を思い出すことも重要と思われます。

２）ビジネスとして成立させることとネットワークの拡大

「春の竹の子取り」、「夏の田植え」、「秋の稲刈り」、「冬の竹林整備」が第一段階のメニューとして上げられていますが、これらは、「どこの中山間地域でも上げられるようなメニュー」になっていると思います。特色・魅力あるメニューづくりのためには、伝統の再創造がキーワードになると考えられます。

もう一度、それぞれのメニューを伝統の再創造という観点から見直し、さらに漂泊者である「共助研メンバー他」の意見の取り入れ、里の旅公社等との連携の可能性等を検討し、長谷らしさを追及した内容とし、その上で料金設定や広報をすべきと思います。

３）会員能力のさらなる発揮や新しい力の獲得

柴北川を愛する会のメンバーや会員以外の長谷地区の方々は、まだまだ素晴らしい潜在能力を持っておられるように思います。まずは、内部での意見交換や行動からさらに能力に磨きを掛け、それと同時に足りない部分を補ったり、技術を受け継いでくれそうな人材の発見、育成に尽力すべきと思われます。

参考文献

１）鶴見和子：内発的発展論の展開、筑摩書房

２）松宮朝：「内発的発展」概念をめぐる諸問題

第４章　今後に向けて

２日間にわたる勉強会の参加者から、参加しての感想及び今後に向けた取り組みのあり方に関する提案などを伺いました。また、勉強会を運営した当会メンバーによる感想・意見についても整理しました。これらの感想・提案などをもって、勉強会第２回の総括とします。

１）　長谷地区からの参加者

●　田園回帰勉強会に参加して　　渡邉　剛

生まれ育った地域にどっぷりと浸っている間に、少しずつ時代が進み、生活様式も変わり、気付かないうちに少子高齢化も進み、医者や商店も無くなり田舎の不便さばかりに目がいくようになっていました。

この度の勉強会により便利さ・手軽さを追求するあまり、昔ながらの郷土料理・薪を使っての風呂・ストーブなど本来の良さを見失っていることに改めて気付かされました。

まずは、「来ちみなぁハウス」を本物の良さが体験できるように改造し、都会の人が田舎暮らしに興味を持ち、ゆくゆくは移住に繋がることが出来れば嬉しいと思っています。

●　ホンモノを味わえる場づくりに　　平石　由美子

家にあった火鉢、この頃やっと扱い方のコツを覚えて足し炭もできだしました。今冬は加えて「こたつ行火」「豆炭アンカ」を手に入れて使っています。優しくて力強い温もり、使うほど元気になる、香ばしく美味しい…。あまりに感動してお隣さんに話したら、「こたつもあんかも使いよん。風呂焚きの時の熾(おき)を使ってるヨ」と当然のごとく言われました。「えーー！こんな心地いいものがずっと前から標準装備…」

近年は若年層の移住希望者が増えているそうで、ここも近々、希望者が殺到すると思います。長谷ラブの者としては人が増えて環境破壊してしまっては悲しいので、今のうちにこの場所のいいところを確認しておきたいと思っています。

●　おやつ作りに挑戦　　甲斐　能美

11 月 25・26 日に共助研さん主催の「田園回帰勉強会」で、柴北川レディースが食事作りでお手伝いをし、田舎体験チームの三人に地元に伝わるおやつ作りに挑戦していただきました。

「地元おやつ」を残したいので、何も知らない人でも作れるようなレシピが欲しいとの声があり、作った経緯がありました。当日はそのレシピが役立ちました。

「石垣餅」と「じり焼き」の二種類に挑戦していただき、芋の皮むき、粉ふるい、水の量等の確認をしながら作業しました。その様子はビデオに収められましたが、お三人のエプロン姿がお似合いでしたのでビデオを見てみたいものです。

夜の交流会には持ち寄りの食材でオードブルを作り、「団子汁」も炊きました。福岡からの皆さんに団子を伸ばして入れていただいたのですが、その様子がまた楽しく、大笑いしながら作りました。

二日目も朝食と昼食（カレーと野菜サラダ）を提供させていただき、忙しい二日間でしたが、みんなと一緒にできる楽しさを体験できた有意義かつ貴重な時間でした。おやつ指導に対するお礼もいただき、貴重な体験をさせていただいた共助研の皆様にお礼申し上げます。

皆さんに満足いただけたのかどうか、それが心配ですが。

● **将来に繋がるヒントが　　赤峰　映洋**

「柴北川を愛する会」において、「共助研」さんとの出会いは衝撃的で、大変な意識改革を我々にもたらして頂いたと感謝しています。

今回の勉強会は、私だけでなく参加した人全員が、昔の生活の懐かしさや人や家族の本来の姿を見つめ直すいい機会だったと思います。今では不自由と思われる生活も、あの頃は全く不自由とは思わず楽しんでいたことに気づかされ、今頃になってあのころに帰りたいような気になったりしました。

この勉強会は、私たち長谷の住民にとってこれから何が大切か、何を求めるのかを考えるいい体験であったし、将来に繋がるヒントを頂いたような気がしています。討論のなかから提案されたことが実現されるよう、一歩一歩進めるためにみんなで協力していくことが最も大切だと思っています。

２）　豊後大野市役所からの参加者

● **「田園回帰勉強会」に参加して　　森本　伸治**

私は、共助研の活動での一番の成果は、長谷地域の豊かさ、そこに住む人の素晴らしさを、地元の柴北川を愛する会の皆さんに伝え、気付かせていることだと思います。

柴北川を愛する会の皆さんは、自分たちの地域を客観的に知ることで、誇りを持ち、課題を見出し、地域を盛り上げる力にしているように見えます。信頼関係もできており、交流会では地元の人ばかりかなと錯覚してしまうほど仲良く、まさに、農村と都市をつなぐ活動がここにはあると感じました。

全体ワークで出された、「ぶんごる食堂」「長谷　川・里体験ビジネス」の事業プランがこれからの活動の柱になることを期待しています。今後も微力ですが協力していきたいと思います。

３）　建設コンサルタンツ協会からの参加者

● **「田園回帰勉強会」を通して　　冨士　祥輝**

私は今回の勉強会に初参加でしたが、長谷は想像していた以上に自然豊かで、人のあたたかさが感じられる場所でした。勉強会を通して、長谷には、表にみえていない魅力が非常にたくさんあると感じました。事実、「じり焼き」や「カボスの蜂蜜漬け（でしょうか？）」など、伝統的な料理やあたたかい場を感じて、これは絶対に廃れさせてはいけないものだと思いました。そういった魅力を外にどう PR していくかが、本題なのでしょうが・・・

今回の勉強会では実感できませんでしたが、春や夏など季節毎の長谷を知ることができたら、もっと深いお話ができたかもしれません。ごくごく短い間でしたが、本当にありがとうございました

４） 勉強会を運営したオペレーショングループのメンバー

● Ｂチームアイデアに関する補足　　木寺　佐和記

前章での記述が抽象的になっていますので、具体策の一例を補足として以下に記します。

① 価値観の共有へ向けてのワークショップの開催

「地域の１０年後のあるべき姿」や「柴北川を愛する会の振り返り」をテーマとして意見交換し合うことが考えられます。意見交換の方法論としては、この地域でも経験・実績がある「ワークショップ方式」を活用することが考えられます。

議論を活性化させるためには、柴北川を愛する会の振り返り報告や外部専門家（共助研を含む）からの最新の情報提供（地方創生の動向、地域産業創出の最新事例等）をまず行い、その後、自由に意見交換することが考えらます。この会合には、なるべく若い人達の参加を促すことが重要と思われます。

なお、参考までに、マーサ・ヌスバウムという学者が、地域が目指す姿を１０項目として整理したものを以下に記します。これら項目を自分達でチェックすることも一つの方法と思われます。

―― ヌスバウムによる「人間としての基本的な、機能的潜在能力」の十項目[2)] ――

① 若死にすることなく、完結した人生の最終地点にいたるまで生き抜きことができる。
② 確固として健康を保つことができる。
③ 不必要な苦痛を避け、楽しい経験を持つことができる。
④ 五感を活用して、想像したり思考・推論を行うことができる。
⑤ 自分たちの外部に存在する事物や人物に愛着を感じることができる。
⑥ 善の構想を形成するとともに、自分自身の生活を批判的に振り返ることができる。
⑦ 他者のために、他者に向かって生きることができる。
⑧ 動植物や自然界に対する配慮と関係を保ちつつ生活できる。
⑨ 笑い、遊び、娯楽活動を享受できる。
⑩ 他の誰のものでもない自分自身の生、自分固有の環境と背景に囲まれて生きることができる。

② メニューの充実とネットワークの強化

例えば、「春の竹の子掘り」を事例として考えれば、「竹の子掘り」に関して、昔実施していた見付け方や掘り方、皮の再利用、食べ方・調理方法、保存食の作り方等を思い出し、この地域の伝統的な何かを見付け、メニューに組み込むことはできないでしょうか？さらに、竹の子栽培に関しては、最新知見の学習をされた方も居られますので、竹林整備のノウハウ提供もメニューに組み込むことも考えられます。さらに、休憩時のおやつとして、Ａチームが検討された「じり焼き」等のおやつ提供も組み合わせても良いと思われます。

参加者には、満開の時期と合わせることは難しいとしても、山桜ポイントを案内するメニューも入れても良いと思われます。ネットワークの強化としては、「里の旅公社」や「中土師振興協議会」との意見交換がまず考えられます。当然、西の台小学校の他、大分市内の小学校等、連携先の拡大検討が考えられます。

共助研は、全国の先進事例に関する情報収集とその研究を行い、成功のポイント等に関する情報提供や実際のメニューづくりを支援することが考えられます。共助研等からの情報提供も組み合わせて、「伝統の再創造」をテーマとしてのメニュー作りが可能と考えられます。

③ 会員能力のさらなる発揮や新しい力の獲得

柴北川を愛する会も共助研も会員の高齢化の問題を抱えています。理想的には、「長谷　川・里体験ビジネス」等を実現させることによって、外部との交流を促進させ、一定の経済的利益や活動している方々の充実感の増大をさせることで、自然とこの地域が盛り上がって行くことが王道と思われます。

活動の過程で、柴北川を愛する会、共助研とも会員能力のさらなる発揮や新たな人材との交流、そして賛同者を増加

させていくことを目標にすべきと考えられます。

「わが愛する友よ、われわれが死ぬときには、われわれが生まれたときより世の中を少しなりともよくして往こうではないか。」 ・・・ハーシェル

● 本物に出会える地域「ながたに」を目指して＝「ながたに」で内発的発展の確認が出来た

波多野　健志

「田園回帰」というテーマの２回目の勉強会は、地域の方（住民とと管轄する行政担当者）を主な構成メンバーとしたチームＡに参加しました。（テーマ：「長谷に伝わるモノ・コトによるブランドづくり」）

話し合いの中で、ブランドづくりという陳腐な言葉では言い表せない、「ながたに」に伝わるモノ・コトを地域住民の方からいろいろと教えていただきました。薪ストーブ、五右衛門風呂、日々のおやつなど地域の方が愛着を持ち、使い続けてきた当たり前のもの、つまり本物が「ながたに」にいろいろ存在しているということが確認できた時間でした。

都市住民たちが、高度経済成長期の過程で、効率化・快適化という名のもとに削ぎ落としてきたモノが「ながたに」にはありました。地域の方が「ながたに」の当り前について再確認が出来た瞬間＝内発的発展の確認と私は考えました。また、「ながたに」には今注目されている星野リゾート等のような、「リッチな時間・空間」を過ごせる必要十分条件がそろっています。地方は過疎化、都市は高齢化が加速度的に進んでいます。都市の健康な高齢者を「ながたに」に呼び込み、是非本物を体験してもらいたいものです。

そこで、共助研が何をするべきなのかが問われます。内発的発展のＢＣＯにはよそ者の支援が重要であると思われます。外への情報発信、資金、拠点の確保、事業化計画の作成、交流人口の開拓など、「ぶんごる食堂」のプロドゥースを共助研が出来ればとも考えます。

本物に出会える「ぶんごる食堂」を早く実現化するために。

● 田園回帰における都市住民の関わり方の心変わり？　　前田　武

今回の勉強会は、業務の都合で２日目からの参加となり、完全に出遅れることとなり、前日状況が判らないままでの勉強会参加となりました。

しかし、その遅れての参加によって、私の中で都市住民の中山間地域への関わり方の考え方に変化が生じることとなり、私自身にとって、とても良い経験でした。

私が参加したグループは「チームＡ」で、「長谷に伝わるモノ・コトによるブランドづくり」で、地域の本物の食材を使って地域の本物の料理を地域の方・都市住民に気軽に振舞う「長谷ぶんごる食堂」の開設、本物とは長谷の日常にあり、長谷の方々が「贅沢な環境」の中にいることを再認識することが重要なことであるなど、話し合われました。

話し合いは大変盛り上がり、興奮し、すぐにでも「ぶんごる食堂」が開店するかの勢いとなった勉強会でしたが、その時、ふと、「私は、ぶんごる食堂の企画の話に何か貢献したか？」と思い返してみると、「私は何もしていない、地元の方々で物語が出来上がっている！！ああ！長谷は、もう皆さんで地域をマネジメントしている。自分たちで動き出している。」と感じました。

逆に、長谷における共助研の役割が、地域づくりのお手伝いの役割から、都市住民として長谷に遊びに来る人となったなぁ・・・・と。

この、経験は、今後の共助研の中山間地域への携わり方、立ち位置のひとつ大きな成果として、私の中に刻まれました。

● **田園回帰から広がる可能性**　　**波木　健一**

一昨年の勉強会第 1 回は、多彩な講師陣と多くの建コン技術者の参加を得て、「地方創生」及び「田園回帰」への我々建設コンサルタントの関わり方を考察する貴重な場となりました。しかしながら、如何せん、福岡市での開催ゆえの限界として、ひたすら頭で考えて議論する場となってしまいしました。

そんな反省もあり、また地方創生フィーバーから 1 年を経たこともあって、勉強会第 2 回は、地方創生活動を進める現場での 1 泊 2 日合宿形式として企画しました。

マーケティング手法の新たな視点として、「顧客の顧客と手を結ぶ！」（「マーケティングに強くなる」恩蔵直人著より）と言う視点があると聞きます。建設コンサルタントにとって「顧客の顧客」は、行政サービスの向うにいる地域の人々であり、その「顧客の顧客」による地域の内発的発展としての「稼げる地域づくり」がテーマであるとなると、地域の現場は必然的に “豊後大野市長谷地区”にフォーカスされました。

空き家活用の試行場として運営している「来ちみなぁハウス」が会場となったことで、内発型発展を意識した地元からの発想も、実現可能性を秘めた「稼ぐネタ探し」となりました。さらに、我々ヨソ者にとっても、現場ならではの臨場感と当事者意識を感じながら、マチから田舎への一方通行の「田園回帰」だけでなく、マチ～田舎間の人の対流による「田園回帰」へと拡大しての活動可能性について議論することのできた、有意義な勉強会となりました。

当会からのかなり勝手な企画と実施を受け入れ、真摯に向き合っていただいた、長谷の方々、豊後大野市の関係者の方々、さらに「柴北川を愛する会」の同志の方々に、改めて厚くお礼を申し上げます。2 日間にわたる視察と協議の場から創出された「稼ぎのタネ」を育て「稼げる地域」としての実を結ぶために、引き続き地域での“土おこし”や“肥料やり”を協働していければと思います。

また、当会による不適当な開催時期設定と宣伝活動不足ゆえに、建コン協会からはたった 1 名の一般参加を余儀なくされた冨士君には、孤軍奮闘で場を盛り上げてくれたその活躍ぶりに改めて感謝します。今回の参加がせめて、彼のこれからの長いコンサルタント人生を豊かなものとする、その基礎固めの一端となればと念ずるのみです。

2 か年で 2 回にわたる勉強会は、当会の位置づけ・役割を改めて明らかにしてくれました。近年の大きな社会変動の下での建設コンサルタントの可能性検討について、現業の延長だけでは得られない観点から、引き続き掘り下げていければと思います。

“「地方創生」「田園回帰」を、ブームからムーブメントへ。”

・・・明治大学教授小田切徳美氏の言葉より

【来ちみなぁハウス】とは

「共助研」が、豊後大野市犬飼町長谷地区の地域活動団体「柴北川を愛する会」と連携しながら、同地区での地域支援活動を始めて８年になります。この間「共助研」メンバーは、毎年福岡から 5～6 回程度出向いて、長谷地区で暮らす多くの方々との楽しい交流をバネとしながら活動を続けてきました。

8 年目となった 2016 年夏に、その活動を更に定着させるべく地元での活動拠点づくりを進めようとなって、「柴北川を愛する会」との共同で、柴北上にある空き家を家主さんのご厚意により安価で借り受け、「来ちみなぁ（“いらっしゃい”という地元の方言）ハウス」と命名して使用しています。

今回の勉強会ではこのハウスが主会場となり、地元の方々とのコラボレーションの場として活躍しましたが、今後は調度品等もそろえて、都市住民による「田園回帰」の模擬体験の場としても活用したいと考えています。

（来ちみなぁハウス店子グループ管理人　波木）

▼　「来ちみなぁハウス」の使用について

●店子会員は、自由に使えます。
　店子会員は、「共助研」メンバーで店子会費を支払った方と、「柴北川を愛する会」会員です。
　現在、店子会員を募集中です。入会希望の方は店子グループ「管理人」までご連絡ください。
●一時使用も可能です。
　店子会員でなくても、ハウスの一時使用は可能です。
　使用料は要りませんが、維持管理のための寄付をお願いしています。
●使用にあたってのいくつかのルール
　・使用希望の方は、事前に「管理人」までご連絡を。
　・節度をわきまえた使用をお願いします。使用後は清掃し、ゴミは持ち帰ってください。
　・使用日記の記帳をお願いします。
●お問い合わせ等は、店子グループ「管理人」まで。
　・渡邊雪法（柴北川を愛する会・事務局長）／波木健一（共助研・事務局）

▼「来ちみなぁハウス」での活動を紹介する「来ちみなぁ」通信の誌面。
（店子グループによる発行で、地元にも回覧で配信しています。）

ながたに暮らし体験記

お披露目とお泊り体験

8月 20 日（土）～21 日（日）は、「来ちみなぁハウス」のお披露目会と初めてのお泊り体験の日です。福岡から参加の M 会員と私の到着は夕刻近くになってしまいました。先発の買出し組みも帰ってきて、お披露目会の始まりです。

本来は、店子の我々がすべてを準備して、地元の方々を招待すべきところですが、アユやカマツカの甘露煮、蒸しナス、ウリと酢味噌等、差し入れがたくさんあり感激です。

夕刻まで暑かったことが嘘のようで、夜になると屋外から涼しい風が入り、虫の声も聴こえてきました。地元の T さんの鳥の声の聞き分け方等の話が面白く、夜は過ぎて行きます。

座敷に 4 人分の貸布団を敷いて就寝の準備。しかし、夜なべ談義は続きます。共助研のこれからや自分達の生い立ち等、日頃はできない話も出てきて気が付いたなら 1 時近くになっていました。こんな風に時間を気にせずに話しができることもこの家のお陰。

翌日は、H 会員も参加して、おやつの再現プロジェクトや県への応募事業について打合せ。M 会員は近い将来のリフォームに向けて、帰りの時間間際まで、外構等の寸法取り、活用やリフォーム等への夢が膨らみます。

ついこの間までは思いも付かなかった「来ちみなぁハウス」での活動が始まりました。この先の展開を楽しみにしてください。

（木寺佐和記）

「来ちみなぁハウス」の使用について

●店子会員は、自由に使えます。
　店子会員は、「共助研」メンバーで店子会費を支払った方と、「柴北川を愛する会」会員です。
　現在、店子会員を募集中です。入会希望の方は店子グループ「管理人」までご連絡ください。
●一時使用も可能です。
　店子会員でなくても、ハウスの一時使用は可能です。
　使用料は要りませんが、維持管理のための寄付をお願いしています。
●お問い合わせ等は、店子グループ「管理人」まで。
　・波木健一（共助研・事務局）
　・渡邊雪法（柴北川を愛する会・事務局長）

2016年9月1日発行

来ちみなぁ 2号

「来ちみなぁ」は、柴北上の県道から北に入った山際にある「来ちみなぁハウス」（和洋室 5 室、ダイニングキッチン、バス、トイレ付住宅）での活動を紹介する通信です。　発行：「来ちみなぁハウス」店子グループ

ながたに風

「来ちみなぁハウス」が動き始めました。

先月 20 日には共助研の店子さん 4 名が「初めてのお泊り」を体験されました。空き家活用に興味を持たれた「大分合同新聞」の取材もあり、記事を楽しみに待っています。

「柴北川を愛する会」も 25 日夜に「役員会」で使わせていただきました。

9 月の「ながたに」の動きですが、中旬には彼岸花が咲き始め、下旬からは稲刈りが始まります。

「柴北川を愛する会」では、3 日（土）にレディースが先進地視察で福岡県東峰村を訪ねます。

4 日（日）は山内河川敷と県道の草刈りを行い、夕方から「来ちみなぁハウス」で慰労会の予定です。

また、来月 10 月 23 日（日）には、恒例となった収穫祭（稲刈り）を行います。　（渡辺雪法）

共助研からの伝言

宿泊キャンプや NPO 協働事業のこと

8 月 6･7 日に、長谷へ大分市の「西の台小学校ととろクラブ」が交流キャンプに押しかけました。

「ととろクラブ」は、平成 23 年の「花いっぱい長谷まつり」に参加して以来 6 年目のお付き合いとなっていて、「柴北川レディス」の料理が大好物です。そんな「ととろクラブ」のメンバーから、「長谷にキャンプに来たい」という意見がでて今年実現となりました。

キャンプの場所は、旧長谷小学校です。6 日は、午後から柴北川で川遊び、夕方から長谷の方々と交流会。子どもたちは周りを気にせず花火ではしゃぎ、楽しく就寝したようです。翌日も、田植えした稲の成長具合を見て、竹で水鉄砲を作ってと、楽しい時間を過ごせたようです。このような交流を今後も続けていければなと思っています。

また、今夏は、「柴北川を愛する会」が大分県の NPO 協働モデル創出事業に応募することとなり、共助研もお手伝いしました。

応募する事業案件は「葦やヨシ等の繁茂を原因とした小河川の洪水不安の解消」です。

この事業への応募団体は、8/30 時点で 28 団体。まず 9 月中旬に書類選考の結果連絡があり、続いて 9 月末に審査員の前で 15 分間のプレゼンテーション、15 分間の質疑応答に耐えなければなりません。最終選考の結果 4 団体が選定される流れとなっています。選定された場合は、長谷の皆さんにも 2 年半の協力をお願いしたいと思いますのでよろしくお願いします。　（波多野健志）

長谷でも「田園回帰」を！

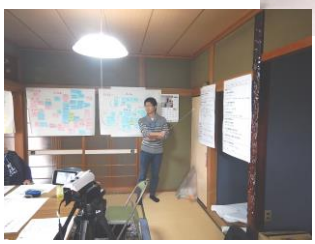
昨年平成 27 年度は、全国で「地方創生」の嵐が吹き荒れました。

全国で少子高齢化が続くなか、東京首都圏への人口集中が近年さらに進んでおり、その結果、50 年後には地方部の多くの自治体が消滅すると危惧されました。そこで、地方部に元気を取戻し、若者達を呼び戻そうと、全国すべての自治体が「地方創生総合戦略」というプランをつくりました。

勿論、豊後大野市でも、地域の資源を活かした仕事づくり、市外からの移住・定住の促進、さらに子育てや婚活の支援などのプランを打ち出して、大都市部などから市内への人口受入れを進めています。

この都市部からの人の移住・定住、さらに移住者などによる農業や産業の活性化などの社会現象を「田園回帰」と呼びます。

私たち「共助研」も、農山村部での元気づくりに「田園回帰」が重要だと考えています。そして、この 8 月に開設した「来ちみなぁハウス」を、“長谷地区での「田園回帰」をどう進めていくか”について、地元の皆さんと共に考え、実行する場としたいと考えています。　（波木健一）



秋空の長谷地区

様々な“つながり”の再構築による共助のネットワークづくり

「田園回帰」勉強会・第２回　成果報告書

編集日　平成 29 年３月

編集者　九州 郷づくり共助ネットワーク研究会

［（一社）建設コンサルタンツ協会 九州支部内］

執筆者　第１章　　波木健一

第２章　（１）波木健一　（２）森脇 亨　（３）松尾敏彦

第３章　（１）矢ヶ部輝明　（２）木寺佐和記

第４章　渡邉 剛　平石由美子　甲斐能美

赤峰映洋　森本伸治　冨士祥輝

木寺佐和記　波多野健志　前田武　波木健一

〒812-0013 福岡市博多区博多駅東 1-13-9 博多駅東 113 ビル ８階

TEL 092-434-4340　　FAX 092-434-4342

共助研ＨＰ： http://www.jcca.or.jp/kyokai/kyushu/q-sato/